
自殺日和。

莓椛

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺日和。

【Nコード】

N5237Q

【作者名】

葛城

【あらすじ】

屋上が全てのはじまりだった。

ちょっと切ない3日間だけの話。

きっかけ

なんとなくオクジョウに来てみた。そう、ただ何と無く。ここに来た意味なんて特にない。

それと同じように何と無く生きて、なんとなく死にたくなっただけ。特に意味なんてない。

風が勢いよく私に向かって来る。髪が後ろに引つ張られる。でも、これが気持ちいい。首がひんやりと冷たい。

私は何をしにきたんだろう。

ああ、特に意味なんてなかったんだっけ。

ただ、なんとなく死にたい。それだけ。

「おまえ何やってるの？」

振り向かなくてもわかる。声だけで誰かわかる。だって私は――から。

「なにも。ただ、なんとなく死にたいなって」

「…おまえ何言ってるんだ？冗談もほどほどにしろよ」

>br<呆れ混じりの声で言われる。

まあ、そりゃそうか。唐突すぎるもんね。冗談に聞こえても仕方ない。というか、当たり前だ。

「そうだね」

「…」

沈黙が流れる。あいつは気まずそうだ。だが、私には心地良い。

あいつとの出会いはいつだったっけ。風に負けないように声を張り上げてみる。あいつに私の声が届いたかわからない。とりあえず叫んだだけ。あいつは思わぬ行動をした。そうだ…。2年前の今頃のここであつた。

今日と同じように屋上に来た私は、1枚の紙を破り捨てていた。風にふわりとさらわれながら、ゆっくりと地面に吸い込まれていく紙の破片を見ていた。

あいつは今と同じように屋上のドアを開け、同じように声かけた。

「何やってるの？」

そして私は笑顔でこう答えた。

「特に何も」

…2年前から全然変わってないな、私。あいつとの関係も。

「おまえ、ほんっ……………！」

私の思考の中にあいつの声が割り込んだ。
風が強くて声が届かない。

「なにか言つた…?!」

風に負けないように声を張り上げてみる。あいつに私の声が届いたかわからない。とりあえず叫んだだけ。

あいつは思わぬ行動をした。私とあいつの距離が縮まる。そう、あいつがこっちに向かって歩いて来たのだ。あいつとの距離はわずか60センチ。

「おまえ、本当に死にたいのか？」

今度は、途切れずに耳に届いた。

オマエ ホントニ シニタイノカ。

頭の中であいつの言葉が反復する。オマエ ホントニ…

「死にたいのかな…？私…」
>br<「……」

あいつは何も答えない。ただ沈黙だけがこの場を埋めつくす。これ
があいつの答えな気がした。

「なんとなくだよ、ただなんとなく死にたい」

まだ、答えない。沈黙が塗り重ねられていく。今度はこっちが居心
地の悪い番。

何分たつただろう。いや、何秒かもしれない。

あいつが口を開く。

なら、変わってみるか、と。

「…え？」

私の口からは、ただそれだけが洩れた。

私はただ理解出来なかった。いや、しようとしなかった。それが何
を意味するかを。

私はただ忘れていたのだ。…いや、忘れたかったのだ。 >br<>
br<

これが、私たちの3日間だけの”とりかえっこ”のはじまりだった。

とりかえっこ

私はあいつと”とりかえっこ”した。

だから私はここにいてるが、存在していない。

それはどういふことか。

それは――

私が今は生きていないということだ。

そう私は今死んでいる。

そして屋上に佇んでいる。

空は限りなく青い。

私の心とは正反対だ。

ふと、掴みたくなつた。手を伸ばしてみた。

もちろん届くはずない。

もっと近くに行きたい。

だから私は――屋上の柵を乗り越えた。

その瞬間、私の中で何かが弾けた。

かこ

「何やってるの？」

「特に何も」

私は笑顔でこう答えた。

「……」

あいつは押し黙った。

「…泣いてるのか？」

一瞬言われてる意味がわからなかった。

泣いてる…？

そんなはずはない。

私がこんなことで泣くはずない。

目尻に触れてみた。濡れてなんかいない。

「泣いてなんかない。目おかしいんじゃないの」

私は冷たく言い放った。

あいつは困ったような、その他にも感情を入り混じらせた。
そして

「ごめん。泣いてるように見えたから」

そう言った。

その瞬間、私の中にあるずっと守ってきたものが崩れた気がした。

けど私は気付かないふりをした。

こづかい

屋上の柵を越えた私は宙を漂った。

空と混じって同化してこのまま溶けて消えてしまいそんな気分になった。

心地よい。ただそう感じた。

ゆっくりと時が流れる。

それはやはり心地よい。心地よいのだが、なんとなく、あいつをのぞき見るのもいいかなとそう思った。

別にこっそり見なくてもいい気がしたが、窓の外からそつとあいつを窺った。

…そして、その行為に至ってしまったことを私は後悔した。
気付いてしまった。

自分が忘れたかった……なかったことにしてしまいたかったことに。

おれんじいろ

いつの間にか周りの世界がオレンジ色に染まっていた。
いつの間にそんなに時間が経っていたのだろう。

一つの影が目についた。
その影を目で辿ると、あいつだった。

「どうだった？俺と代わって」

「楽しかったよ」

あいつは目を見張った。

「……楽しかった？」

そういう答えが返ってくるとは全く予想してなかったみたいだ。
面白い顔になっている。

「うん。ずっとこのままでもいいかなって」

あいつが息を呑むのがわかった。

「…おまえ、本当にふざけるのもいい加減にしろよ」

あいつは怒っていた。怒りに溢れていた。
…だが、その中には筆から絵の具をばたばた垂らしたように、点々とした哀しみが感じられた。

私は、その理由に気付きたくない。

あさ

気がついたら朝になっていた。

昨日のあいつの表情が頭から離れなかった。

結局あいつはあのまま何も言わずに屋上から去って行った。

このまま、あいつのいないどこかに行ってしまうのか。

そうしたら、苦しむことなんてないのに。

…いや、どこに行っても意識がある限り、苦しむだろう。
たとえ、死んだとしても。

こうして意識がある限りは。

自分の考えに集中していたため、屋上に侵入してきた者に気付くことができなかった。

「昨日は悪かった」

なので、突然声が振ってきたことに驚いてしまい、動揺してしまった。

「えっ!？」

おもいつきりバランスを崩し、あいつに突っ込んでしまった。
文字通り、突っ込んで、通り抜けた。

その時のあいつの顔が、——私の頭に焼き付いた。

終わりはもう、近いのかもしれない。

めかくし

「悪い……」

「いいよ」

私はあいつに向かって続けていい放つ。

「ほんとにいいんだよ？このままでも。私はこのままでも十分満足だから」

あいつは頭がついていていないようで、間抜けな表情をしている。

「……望むなら、ずっとこのままでいいんだよ？」

あいつはやっと私の言っていることが呑み込めたようだ。

「おまえ、自分が言っていることが本当にわかってるのか？」

「わかってるよ」

そう、わかってる。

私はもう一度わかってるよ、とあいつに言った。

「でも、君が望むなら、私はきつと笑顔でいられるから」

それは嘘だ。

私はきつと苦しむ。

だけど、それをあいつが望むなら――

私は、やっと目隠しを外した。

かくしたもの

あいつはきっと私の隠していた事実気がついただろう。

「そんなことは出来ない」

そういうと思ってた。

だって、私、そんなところが――

「そういうと思ってた。でも、ほんとにいいの？」

私はあいつの目を真っ直ぐに見た。あいつの目は揺らいでいた。

「ああ。そんなことしていいはずがない」

「していいのなら、いいんだ？」

私は意地悪を言った。

迷っている気がしたから。

「……」

答えないあいつを見るかわりに、空を仰いだ。

綺麗だ。空は私のことなんて関係なく、どこまでも澄んで、そして美しい。

「……ごめん。また、明日来る」

――明日。

良くも悪くも明日で終わる。

私とあいつの関係も…。

もう、崩れ始めてはいるけれど。

こたえ

終わりの朝がやって来た。

そしてあいつがやって来た。

あいつの答えは――昨日と変わることなく、否だった。

予想していた通りなので、さほど驚かなかった。

「ほんとにいいの？」

だから、これは最後の確認。

「ああ」

私は笑った。

けど、私は心で泣いた。

「おまえ、2年前と同じ顔してるぞ……」

…そう、私は自分に蓋をしていた。

2年前と同じように。

見たくないモノ、聞きたくないモノ、知りたくないモノ、感じたくないモノ……挙げたらきりがないけど、私は嫌なこと全てに蓋をした。自分に目隠しをしていた。

そして私は時を止めていた。

なかったことにしたかったから。2年前、壊れた時計のように時を止めていた私に、油を挿し、ぜんまいを巻いてくれたのがあいつだ

った。

今回も油を挿してくれたのはあいつだ。
けど――

あいつはもう私のぜんまいを巻くことはできない。

だって、あいつは――

もう私の日常にはいないのだから。

つむぐ

「…確かにそうかも。でも…」

「でも…？」

「今回はもう君がない」

私の顔は歪んでいたと思う。
あいつの顔も歪んでいた。
けど、我慢出来なかった。

「私ずっと認めたくなかった。気付きたくなかった。他の子が好きなんて…、君がいなくなっただけ…。だから今までのことなかったことにした。出会ったことも、楽しかったことも、辛かったことも、全部ぜんぶ………！！」

後半の方はきちんと伝わったかどうかわからない。
私は泣いてしまっていたから。

「なかったことにしたかった。忘れて、蓋をして、目を背けて…けど、ほんととはどこか苦しくて…。あの子を見る目が、私に向けられる目とは全然違うこととか、私という時とは全然違う表情をすることとか、笑顔とか話し声とかぜんぶ…全部…本当に辛くて見たくなくて、信じたくなって辛かった。ずっとこのまま私の日常が続くなんて耐えられなかった。君なんて見たくないって思った。消えちやえ…死んじゃえて…」

どんどん私の言葉を支離滅裂になっていく。それと同時に涙の量も増えていく。

「けど…ほんとに君がいなくなったら辛いなんてものじゃなくて、すごく大切なものを失くしたような気持ちになった…。何をしても私の日常は満たされなかった…。こんなに君が……………」

「…ごめん」あいつは言った。

そしてこれが――

終わりの合図。

さっし

あいつの言葉で、私の言葉は終わった。

「…ごめん。けど…俺は…」

「…わかってるよ。大丈夫」

ほんととは全然大丈夫じゃない。

「ごめん…。ごめんな」

けど、私強くなりたい。
だから――

「大丈夫。困らせてごめんね」

そう笑顔で言う。

あいつには笑ってほしい。

「いや…。俺」

「3日間、お話し出来た？」

あの子と――

「え？」

急な話題転換にあいつは慌てる。

「あの子と、話せた？楽しかった？」

「あ…、うん」

あいつは微かだが嬉しそうに微笑んだ。

「なら、よかった」

私も微笑んだ。

「…ありがとう」

それがあいつの最後の言葉だった。

そして、“とりかえっこ”は終わりを迎える。

私は最後に声には出さずに、あいつに――

あいつはそつと微笑んだ。

そして本当におしまい。

だけど私の日常は終わらない。
止まっていた時はやっと流れ出した――。

さいご（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

…なんか終わり方が微妙な気がします……。

まあ、ご愛嬌ということ……↑

というか、題名も自分どうなのよとっつこみたくなります…。

書き始めた頃はたぶんもつとどろどろした感じにしたかったんだろ
うと思われまう↑

それで新しい題名思いつきませんでしたので、このままになってしま
いました（＾Ｏ＾）↑

では、このあたりで失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5237q/>

自殺日和。

2011年3月3日21時52分発行